

# 本を読むことの楽しさを 「声」で伝えていけたらって 思います。

フリーアナウンサー 北村浩子さん

東京都出身。短大卒業後、メーカー勤務を経てアナウンサーに。  
現在はFMヨコハマでニュースを担当しているほか、毎週月曜日の朝8時  
35分からの番組「books at 0」でパーソナリティも務めている。これまで  
に紹介した本は約1900作。また、同局のサイトで2000年から5年  
間にわたり連載した『ヒロ☆コラム』は2005年に書籍化された（日本  
文化出版。文庫解説や書評なども手掛ける。日本語教師としても活躍中。

江森：北村さんはFMヨコハマで「book

ks at 0」というコーナーを10年以上  
続けてられているほか、「本」や「読書」に  
関する様々な活動をされていますが、最近  
ではどんなことをされていますか？

北村：今年度「港南区読書大使」に任命さ  
れて港南区の読書活動を推進するという役  
目をいただいています。平成26年の4月に  
「横浜市民の読書活動の推進に関する条例」  
という条例ができたそうで、各区でもそれ  
ぞれ独自の取り組みがあって、その一環と  
いうことのようにです。

江森：北村さんに目をつけるのは港南区も  
ニクイですね。具体的にはどんなことをし  
ているのですか。

北村：大きな仕事としては、港南区内の小  
学校に行って、6年生のクラスで本につい  
ての授業をしたこと、区長さんと対談した

ことなどです。

江森：小学校ではどんな授業をしたので  
すか？

北村：私たちが普段何気なく使い分けてい  
る言葉の違いにも意味がありますよね。「旅  
行」「旅行」「大事」と「大切」、「気分が悪い」  
と「気持ちが悪い」…。まず、みんなが外  
国の人に意味の違いを訊かれたらどう答え  
る？と質問して、少し考えてもらいます。  
そのあと、ではどうして本を書いた人は「旅  
行」ではなく「旅」という言葉を使ったのか？  
を考えてもらって、そうやって読むと、ま  
た違った楽しさがあるよということを伝え  
る授業をしました。

江森：他にはどんな活動をされていますか。

北村：神奈川県の高校生の図書委員が学校  
で発行している「図書だより」のコンク  
ールが毎年開催されているのですが、その表

彰式で講演をしたら、そこに参加していた  
高校生からウチの高校の読書会に来て欲  
しいという話があって、今年はそんな活動も  
始まりそうです。

江森：今の子供って、そういう場面で要領  
がいいというか、我々の頃とは違うなあと  
思いませんか。自分がそうだっただけなの  
かも知れませんが、もっとしゃべらなかつ  
たし、あんなにハキハキしてなかつたし…。  
人付き合いがうまいなあって思います。も  
ちろんいいことなんですけど、ちよつと子  
供らしくないと感じることもあります。

北村：確かにそういうところはありますね。  
それはSNSと無関係ではないと思います  
し、電話しか通信手段がなかった時代とは  
明らかに違いますね。家に帰っても常に誰  
かと「話して」ますし、絵文字とかスタン  
プとかで会話できるということは、実は私

たちよりも多くの言葉を獲得しているとい  
うことなのかも知れません。でも面と向かっ  
て話したらそんなに違わないような気がし  
ます。

江森：なるほど、それも人間の「進化」な  
のかも知れませんか。「神奈川本大賞」って  
いうのもやってみましたよね。

北村：はい、神奈川県内の書店員さんや図  
書館司書の方々とチームを組んでやりまし  
た。100字以内で書いてもらった本の推  
薦文を県民の投票で選ぶというものです。  
一次審査はフロンタールの中村憲剛さんや、  
パラリンピック選手の成田真由美さんなど  
10名の審査員が10作品を選び、二次審査は  
主に県内の書店に投票箱を設置して、一般  
投票で大賞を決めました。

江森：手応えはいかがでしたか。

北村：「〇〇本大賞」というイベントは、全

国的に様々な地域で開催されているのですが、神奈川では初めての開催にも関わらず「県民投票」に挑戦したので、運営は手間がかかりましたが、たくさんの方に参加していただけて達成感がありました。次回に向けてだんだんと良くなっていくのではないかと思います。

**江森**：社会全般において「デジタル化」が進行していく中で、「本」のデジタル化も進んでいます。私自身は「本」を紙で読もうが、デジタルで読もうが、それは読む人の好きにすればいいと思っていますが、「本は紙よりデジタルがいい」という人はいまだ出会ったことがありません。みんなが好きだと言っているにも関わらず、経済的な理由で紙の本が廃刊になり、WEB版や電子版に変わってしまいました。印刷会社だからというわけではなく、ひとつの「文化」が、経済的理由によって廃れていってしまうということに、なんとも言えないやるせなさを感じます。

**北村**：県内にお住まいのノンフィクション作家佐々涼子さんが書いた『紙つなげ！』という日本製紙石巻工場の再生を題材にした本がベストセラーになっていますが、先日出版社の早川書房さんから声をかけていただいて、佐々さんや石巻の本屋さん、日本製紙の方などが出演されたフォーラムのコーディネーターをする機会がありました。そこでいかに「紙」というものが情熱をもって作られているか、本当

にたくさん種類があって、レシピがあって、原料の調達に苦労があって…という話を伺いました。彼らの紙に対する情熱とか愛情というものが、本を読むという動機にもつながっていると実感できましたし、登壇者の皆さんの「私たちは紙の本を愛しているんだ」という気持ちが伝わってくるフォーラムでした。

そもそも『紙つなげ！』を読むまで、文庫本の紙なんてみんな一緒だと思ってましたからね（笑）。角川文庫と講談社文庫では



紙が違うなんて、しかも紙を作った人は書店で本を見ただけで、これはどの機械で作った紙かということもわかる。本当に自分の子供のように思っているなんてこと全然知りませんでした。そういうことを知ると、月並みですけど当たり前じゃないということに気付くし、紙の色とか、手触りとか、匂いなんかを感じながら読むことの喜びを、紙の本は与えてくれるんだなあと感じました。

**江森**：しかし現実には印刷市場の中で最も落ち込みが激しいのは書籍印刷の分野なんですね。そんなに作る側も読む側も愛してくれているものでさえ、無くなってしまおうというのを、なんとかできないものかなあと…。

**北村**：私が皆さんに本を薦めるのは、お金を出して本を買って欲しいからなんです。出版社や本屋さんがお金を得て商売をしていってこれないと、例えば海外でおもしろ

い本が出版されても、その版權を買って日本で出版することができなくなってしまう。おもしろい本が読めなくなってしまうんです。それは私がこれからおもしろい本を読みたいという利己的な動機とも重なっていることなんです。消費者ができることとして、結局買うことですから。

**江森**：そうですね。そういう意味でいうと、印刷業界が「本を買ってくれ」という運動はしてないですね。紙を「使ってくれ」ではなく、「買ってくれ」というアピールは大事かもしれないですね。

**北村**：タダでものごとを享受しているのだんだんやせ細っていくつまらないことになるんですよ。それは本だけでなくなんでも同じ。情報はタダではないから。そこに気付かずに、みんなが「得しちゃった」って思っていると、結局最後には価値のないものしか手に入らなくなるような気がするんです。だからせめて自分の好きなものにはお金を使おうよって言いたいですね。私の場合はそれが本だということですけど。

**江森**：以前にすごく好きなジャーナリズム系の雑誌があって定期購読していたのですが、ずいぶん前にWEB版になったんですよ。もちろんWEB版の会員になったのですが、何か月かしたら結局読まなくなっちゃったんですよ…。

**北村**：でしょー、読まなくなりですよ。なんでなんだろう？私も世の中の本が全部電子版になったら、手持ちの紙の本ばかり読み返すと思います。結局そこなんだと思うんですよ。何なんでしょう？

**江森**：たぶん記事だけじゃなくて、写真とか、見出しとか、ちょっとしたデザイン的な飾りとか、その周りの情報も一緒に見ている

からじゃないかな？電子版だとそれが気から、なんかつまらないというか、読む気にならない。

**北村**：そうそう、それはたぶん人間工学的なもので、ある部分を読んでいるんだけど、他の箇所も視界に入っていると、残りのページ数を手で感じているとか、そういうこと。そんな「何か」が読書の「楽しさ」を作っているんですよ、きっと。

**江森**：これからどんなことをしていきたいですか。

**北村**：普段から文字を読む人は、活字を読むことに慣れてるので、本の世界に入るのにもそんなに抵抗はないと思うのですが、活字を読む習慣のない人がちょっと本でも読んでみようと思ってもらえるような活動をしていきたいですね。それには朗読とかラジオとか、音で伝えていく必要があると思うんです。books At o zを500回聴いてくれた人が、500回目に初めて本を買ってくれたとしたら、それは私にとっですごくうれしいことです。

**江森**：声が武器の北村さんにはうつつけの活動ですね。私たちの活動も改めて見直す必要がありそうですね。



寿

# リメンバーコトブキ

## 第2回「良くしようとするのはやめたほうがよい」

文 江森克治

寿福祉センターで長年相談業務に携わってきた村田由夫さんのインタビュ集『良くしようとするのはやめたほうがよい』ドヤ街から、アルコール依存や登校拒否を通して「生き方」を考える』に

12月のある日曜日、地域の活性化のために友人が企画した「朝市」に立ち寄った。底冷えのする曇り空の下、子供からお年寄りまで、文字通り老若男女が一緒になって大きな声を張り上げる光景にはのぼのとして帰路につこうとすると、1枚の看板が目にとまった。「知的障害者施設の建設絶対反対!」朝市でもらった温もりがいつべんに吹き飛んでしまった。

次のようなエピソードがある。ドヤに住んでいたひとりの老人が、部屋がゴミで埋もれているということで管理人から出て行ってくれと言われた。そこで村田さんがなんとかしようとして行くと本当にひどい。手伝ってあげるから片付けようと、これは捨てて良いかとひとつずつ聞いていくが、全部いるという。仕方ないのでその老人には事務所を待たせてもらって、スタッフで部屋を片付けて管理人を説得し、老人はなんとかドヤに居続けられることになった。

(以下引用)

『三日ぐらいたってからお礼に来たけ

れど、とつても元気がなくなっていた。その時はまだ私、いいことをしたと思っていた。ところが段々わかってきて、何年かたった後ですよ、ひでえことしたと思いましてね。もうその時、亡くなっていたから、彼に言えなかつたんですけれども。思い出すとチクツと心に痛みがありま

す。

(中略)

周りの人たちはそれを、理由はどうあれ許容していたわけです。誰も傷つかなかつたしね。ところが片付けちゃったのね。私も管理人さんの手先みたいになつて。それがやつぱり、かなり痛みと



http://honto.jp/ で販売中。972円

# 「ローカルグッドヨコハマ」が、『より良い横浜』の実現に向けて動き出しました

横浜の課題と市民を1つでつなぐWEBサイト、「LOCAL GOOD YOKOHAMA」。特定非営利活動法人横浜コミュニティデザイン・ラボが運営しているこのサイトでは、行政と市民が一緒に「横浜の課題」について考え、「横浜を良くしたい!」という思いを実現するために、さまざまな取り組みをしています。このWEBサイトをきっかけとして、地域で暮らす市民が地域課題を「自分のこと」として認識して、自ら課題解決に取り組みようとする動きを生み出すことを目指しています。また、ユーザー登録をすると、『クラ

ウドファンディング・スキル登録』のしくみが使えるようになります。クラウドファンディングとは、「群集(Crowd)」から「資金調達(funding)」をする手法のことで、ネットを通じて多数の支援者から資金を集めることが可能です。また、資金だけでなく、個人の能力や労働力を提供し、特定のプロジェクトに参加する形もあります。

たプロジェクトが次々に生まれています。行政、市民、企業、大学など多様な主体をつなぐ横浜の『新しい力』「LOCAL GOOD YOKOHAMA」に期待しましょう!



クラウドファンディングに挑戦する「いのちの木」(上)と「ファールニエンテ」(下)

人は誰しも、理想の生き方、理想の暮らしというものを思い描き、それに向かって日々努力しているのだろう。故に、それをおびやかす存在に反応し、排除しようとしてしまう。私には私の生き方があるように、ドヤのおじいさんにも彼の生き方がある。許容したり許容されたりしながら生きていければ良いのだが。



http://yokohama.localgood.jp/

## 横浜創英中学・高等学校 吹奏楽部

大口の魅力を紹介する「大口自慢」。  
今回ご紹介するのは「横浜創英中学・高等学校の吹奏楽部」  
さんです。

同校は弊社から歩いて3分程の所にある男女共学の私立中高併設校です。日頃から若い学生さんたちの存在は地域に活気を与えてくれています。

サッカー部が全国大会に出場するなど部活動も盛んで、中でも同校の吹奏楽部は、吹奏楽コンクール東関東大会の常連校の実力です。10月26日に開催された「第62回全日本吹奏楽コンクール」では、見事金賞を受賞されました！創部以来の悲願でもあった全国金賞を受賞し、喜びにあふれる学生さんたちの表情は、まぶしいほどに輝いていました。

「心のこもった音楽を」をモットーに日々ハードな練習をこなすほか、地元商店街のお祭りや市内各地のイベントにも積極的に参加しています。今年特に部員同士の団結力が強く、「多くの人に感動と感謝の気持ちを届けたい」という思いが演奏で表現できたと言ってくれました。

「今後の目標は」と尋ねると、「金賞の受賞は目標であってゴールではなく、これからがやっと自分たちの音楽が伝えられるスタートだと思っています」と大人顔負けの立派なコメントが返ってきました。「努力すれば、夢は叶う」と信じて生きる若者の姿が、明るい未来を予感させてくれました。



# 大口自慢

学校法人堀井学園

横浜創英中学・高等学校

横浜市神奈川区西大口28

☎045(421)3121

http://www.soiei.ed.jp

## Kyoshin TODAY

### 情報誌『i-roiro』発刊！

#### 横浜デジタルアーツ専門学校と協働で



起業支援センター「まちなかbizあおば」と横浜デジタルアーツ専門学校が協働で制作した情報誌を10月に創刊しました。

情報誌のタイトルは『i-roiro（イロイロ）』。「今まで知らなかった働き方、生き方、自分の可能性をイロイロ感じて欲しい」という思いが込められています。創刊号は、会員メンバーである女性起業家のインタビュー記事と、「ローカルグッドヨコハマ」についての特集を含め12ページの冊子。制作にあたり、取材や編集、表紙のデザインなどに才能を発揮してくれました。

そして、10月31日、たまプラーザ駅前で『i-roiro』の街頭配布を実施しました。横浜デジタルアーツ専門学校の学生さんが、街行く人たちと言葉を交わしながら360部を配布。「まちなかbizあおば」のPRにつながる実りのある一日となりました。

### 10月ありがとうの日は「休服時間」

10月は衣替えの季節ということから「休服時間」（100%天然素材のポール型防虫剤）をプレゼントしました。3色の用紙でひとつひとつ飴玉のように包み、駄菓子をイメージして袋詰め。専用のスタンプも作成し、可愛らしさもプラスしました。『防虫剤』と「こまどり」ドラッグストアなどで市販さ

れているものが一般的ですが、これはアメリカ杉を丸くカットしたもので、ほんのりとスギのいい香りがし、（いわゆる防虫剤特有の臭いもなく）環境にも小さなお子さんにも安心の防虫剤です。来年、夏物の衣類を出した時に、「あら…」と和やかな気持ちになって頂けたら嬉しく思います。



### CSR報告会「ありがとうナイト」開催！

11月27日（木）、みなとみらいのシェアスペース「BUKAT SUDO」（ぶかつどう）にて、約100名のお客様をお迎えして、当社初のCSR報告会「ありがとうナイト」を開催しました。このイベントは、日頃お世話になっている皆さまに、「当社の取り組みを何か楽しい形でお伝えしたい」という思いから、日頃の活動に関するパネル展示や、弊社で制作した作品などを展示し、ステークホルダーの皆様にご覧いただきました。ご来場のお客様からは、たくさんのお励ましのお言葉を頂くと共に、「会社の全体像がよく分かった」、「活気があって、楽しいCSR報告会だった」との嬉しい声も聞かれました。これからも皆さまの信頼にお応えし、お役に立てる仕事をするべく努力してまいります。今後ともよろしくお願ひ致します。



〈お詫び〉この度予想を超える参加申込をいただいた関係で、直前に会場を変更し、一部のお客様には大変ご迷惑をおかけしました。また、ご招待者も限定せざるを得ず、日頃お世話になっているすべての皆様をお招きすることが叶いませんでした。心よりお詫び申し上げます。

JO（ジエイ・オー）2015年1月号（第10号）

発行者：株式会社協進印刷

横浜市神奈川区大口仲町108番地

TEL：045(431)6611

FAX：050(3730)6273

URL：http://www.kyoshin-print.co.jp

